

令和 8 年 1 月 28 日  
総合教育センター大研修室  
午前 10 時 ～ 正午

## 令和 7 年度 第 2 回葛飾区特別支援教育推進委員会 次第

### 1 開会

### 2 議題

(1) 葛飾区特別支援教育事業の取組状況について 資料 2

(2) 葛飾区特別支援教育に関する研修について 資料 3

(3) 各検討部会における課題と方向性について 資料 4

(4) 令和 8 年度 葛飾区特別支援教育推進委員会について 資料 5

### 3 その他

### 4 閉会

---

#### 【資料】

- 資料 1 令和 7 年度 葛飾区特別支援教育推進委員会名簿
- 資料 2 令和 7 年度 葛飾区特別支援教育事業の取組状況
- 資料 3 令和 7 年度 葛飾区特別支援教育に関する研修
- 資料 4 令和 7 年度 各検討部会における課題と方向性
- 資料 5 令和 8 年度 葛飾区特別支援教育推進委員会の年間予定

令和 7 年度 葛飾区特別支援教育推進委員会名簿

	所属	職位	氏名
委員長	葛飾区教育委員会事務局	学校教育担当部長	山梨 智弘
副委員長	聖徳大学	教授	河村 久
委員	都立よつぎ療育園	園長	玉木 久光
委員	のぞみ学園かめあり	園長	早川 薫
委員	葛飾区私立幼稚園連合会	葛飾こどもの園幼稚園長	加藤 和成
委員	葛飾区私立保育園連盟	認定こども園すなはら園長	高橋 広美
委員	葛飾区私立保育園経営者協議会	奥戸保育園長	高橋 龍晟
委員	葛飾区私立学童保育クラブ連盟	葛飾区私立学童保育クラブ連盟会長	塚田 剛士
委員	葛飾区立小学校長会	亀青小学校長	渡邊 浩
委員	葛飾区立中学校長会	四ツ木中学校長	兼子 容子
委員	都立葛飾ろう学校	校長	姫野 滋子
委員	都立葛飾盲学校	校長	竹内 大吾
委員	都立水元小小学園	統括校長	小池 巳世
委員	都立水元特別支援学校	校長	野口 幹人
委員	都立葛飾特別支援学校	校長	村山 大介
委員	葛飾区福祉部障害者施設課	課長	林 大祐
委員	葛飾区子育て支援部子育て施設支援課	課長	中安 祥之
委員	葛飾区子育て支援部保育課	課長	大石 睦貴
委員	葛飾区子育て支援部子ども・若者担当課	課長	尾崎 隆夫
委員	葛飾区児童相談部子ども家庭支援課	課長	富里 友季子
委員	葛飾区教育委員会事務局学務課	課長	大倉 義雄
委員	葛飾区教育委員会事務局教育指導課	課長	杉山 茂

事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター教育支援課	課長	二ノ宮 正信
事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター管理担当課	課長	松井 美貴子
事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター教育支援課	統括指導主事	田辺 留美子
事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター教育支援課	指導主事	納 太郎
事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター教育支援課	指導主事	田場 正幸
事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター教育支援課	特別支援教育係長	後藤 雪絵
事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター教育支援課	就学相談係長	村上 貴寛
事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター教育支援課	特別支援教育係員	浅井 雄太
事務局	葛飾区教育委員会事務局総合教育センター教育支援課	特別支援教育係員	堤 麗夏

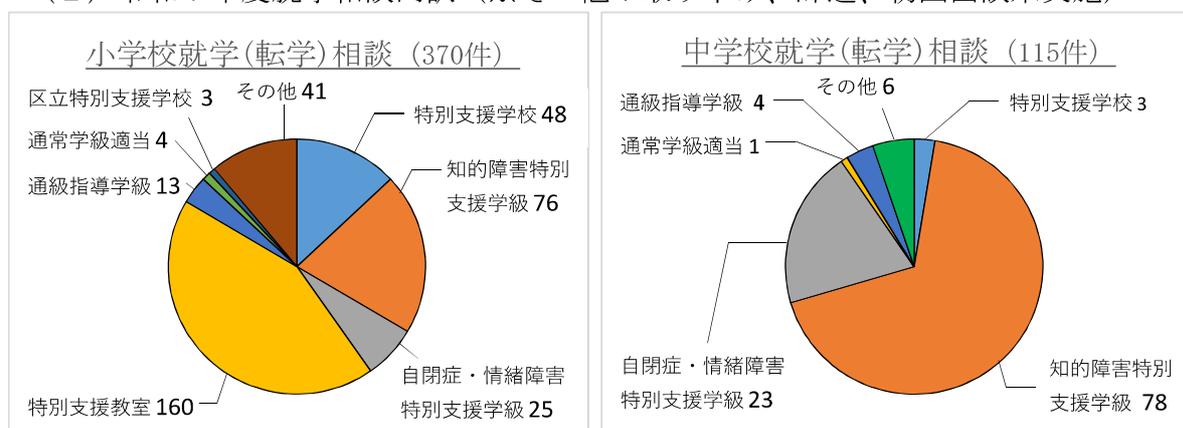
# 令和7年度 葛飾区特別支援教育事業の取組状況

## 1 就学相談について

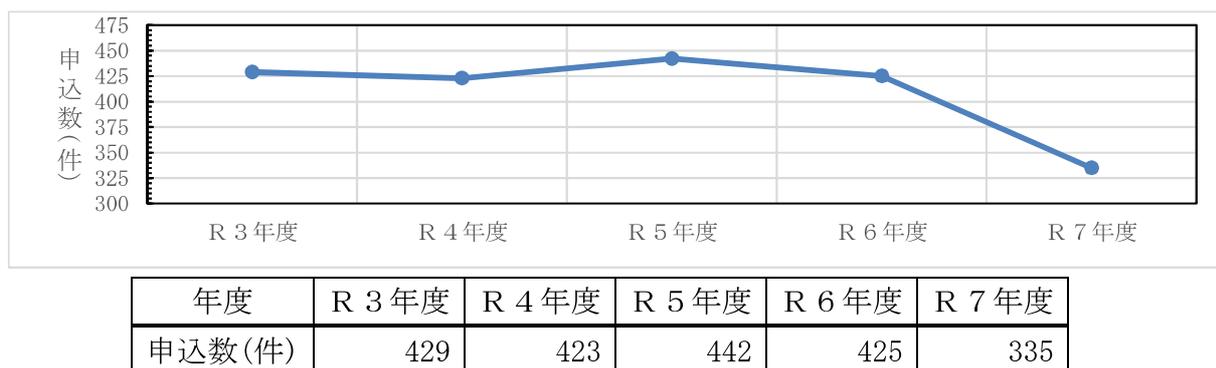
(1) 就学相談受付数（令和7年度は令和8年1月1日時点）



(2) 令和7年度就学相談内訳（※その他：取り下げ、辞退、初回面談未実施）



(3) 引継ぎ会申込数（令和7年度は令和8年1月1日時点）

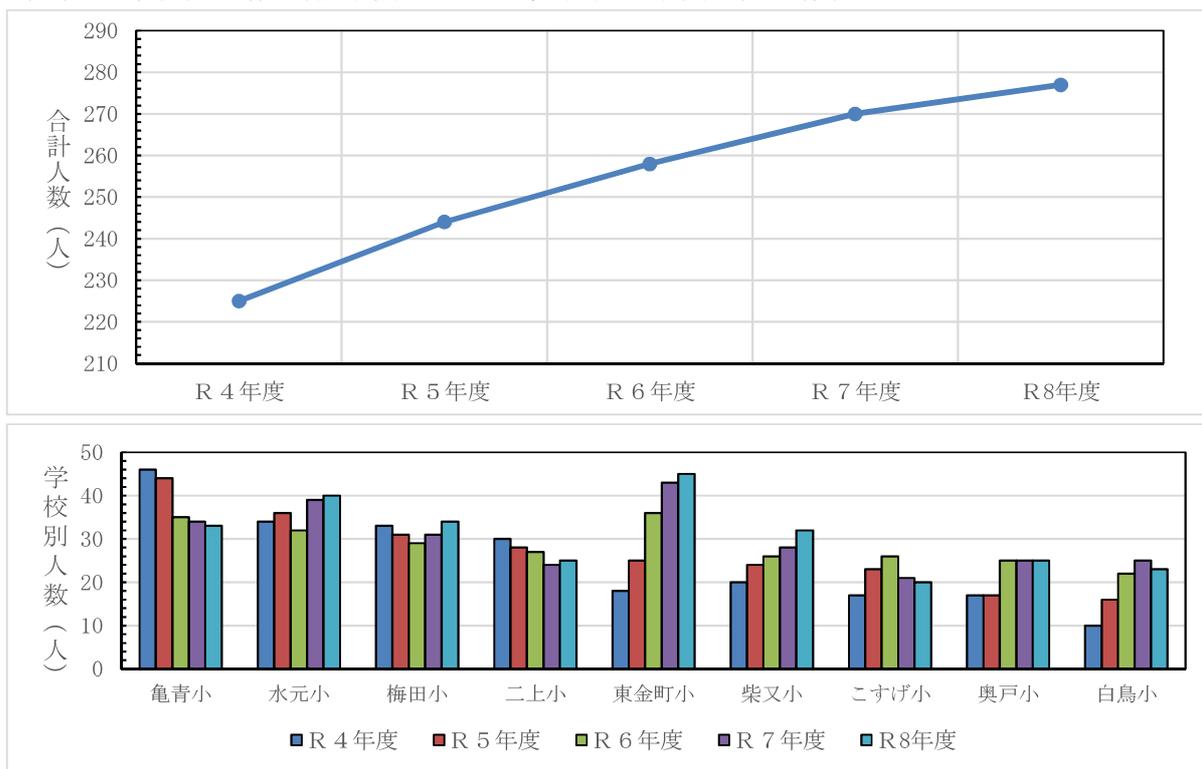


(4) 現状と課題・今後の方向性

- ① 令和6年度から、特別支援教室相談会の総括を拠点校等の校長が担うことで、学校管理職の立場からの所見が得られ、就学相談会の充実に繋がっている。この取組みを踏まえ、令和8年度からは、小・中学校の就学相談会及び自閉症・情緒障害特別支援学級相談会についても、設置校の校長が総括を行う方向で検討している。
- ② 就学相談専門員（総合教育センターの会計年度職員）の欠員は令和7年10月に解消した。しかし、就学相談件数は今後も同程度で推移すると見込まれるため、他区の事例も参考にしながら、就学相談の運営方法を検討していく。

## 2 知的障害特別支援学級について

(1) 小学校児童数（各年度4月7日、令和8年度は見込数）

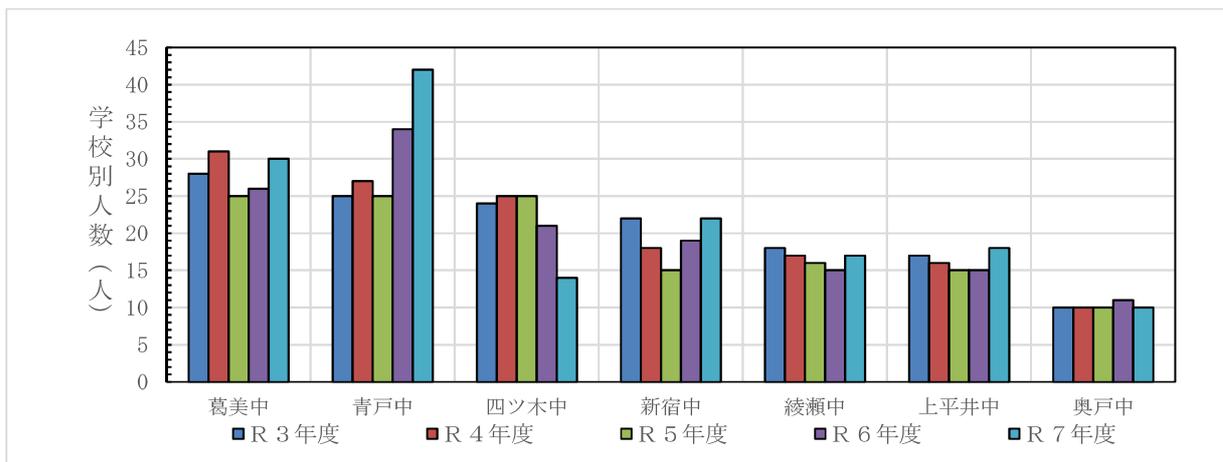
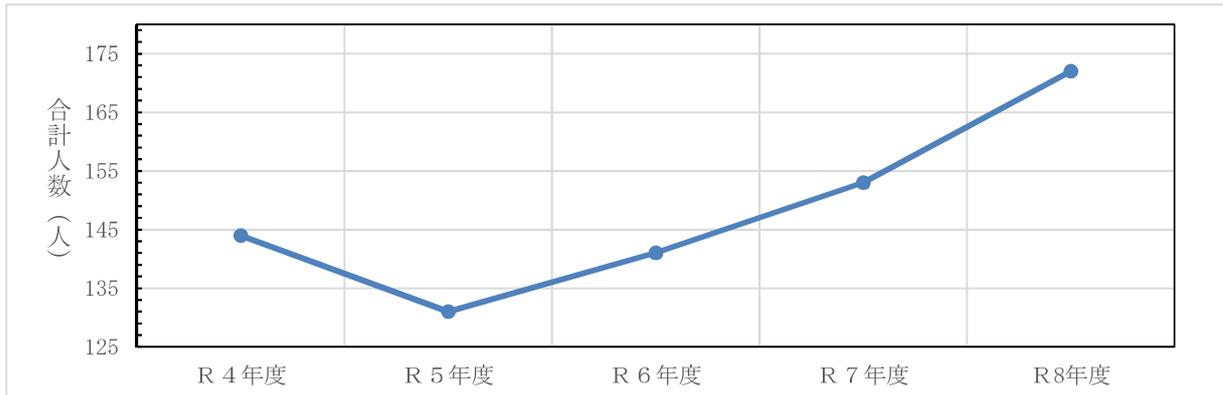


年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度
亀青小	46	44	35	34	33
水元小	34	36	32	39	40
梅田小	33	31	29	31	34
二上小	30	28	27	24	25
東金町小	18	25	36	43	45
柴又小	20	24	26	28	32
こすげ小	17	24	26	21	20
奥戸小	17	17	25	25	25
白鳥小	10	16	22	25	23
合計(人)	225	244	258	270	277

参考：R 8年度 小学校学年別児童数内訳

学校名	亀青小	水元小	梅田小	二上小	東金町小	柴又小	こすげ小	奥戸小	白鳥小	合計
1年生	4	2	5	6	8	7	3	2	3	40
2年生	7	7	5	2	6	1	1	2	3	34
3年生	3	11	5	6	7	7	7	5	5	56
4年生	5	3	5	4	13	5	4	3	7	49
5年生	3	10	4	4	4	5	2	7	3	42
6年生	11	7	10	3	7	7	3	6	2	56
合計(人)	33	40	34	25	45	32	20	25	23	277
学級数	5	5	5	4	6	4	3	4	3	39

(2) 中学校生徒数 (各年度4月7日時点、令和8年度は見込数)



年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度
葛美中	31	25	26	30	25
青戸中	27	25	34	42	47
四ツ木中	25	25	21	14	16
新宿中	18	15	19	22	29
綾瀬中	17	16	15	17	21
上平井中	16	15	15	18	25
奥戸中	10	10	11	10	9
合計(人)	144	131	141	153	172

参考：令和8年度 中学校学年別生徒数内訳

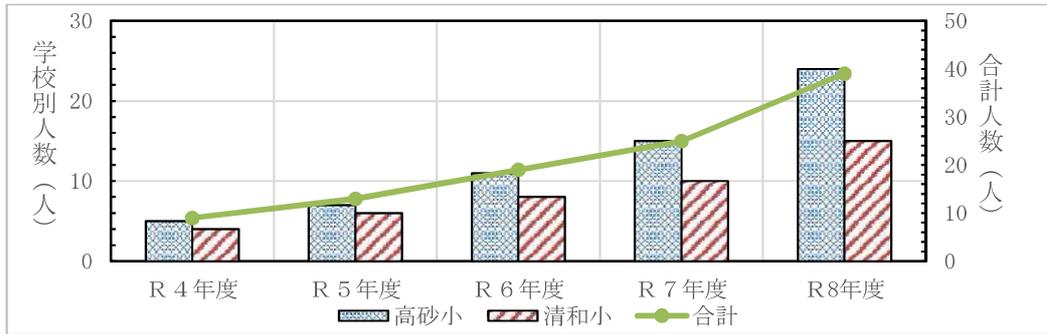
学校名	葛美中	青戸中	四ツ木中	新宿中	綾瀬中	上平井中	奥戸中	合計
1年生	8	13	6	10	4	11	4	56
2年生	9	17	8	8	10	8	3	63
3年生	8	17	2	11	7	6	2	53
合計(人)	25	47	16	29	21	25	9	172
学級数	4	6	2	4	3	4	2	25

(4) 現状と課題・今後の方向性

- ① 令和7年度から、小学校の宿泊学習については保護者・児童の希望があれば、通常学級の宿泊学習に参加できるようにした。また、中学校については、各校の通常学級の宿泊学習に参加することとした。
- ② 水元小、東金町小、青戸中の在籍児童・生徒数が増えており、今後、使用する教室の増設について検討が必要である。
- ③ 令和7年度から、亀青小、白鳥小、東金町小の3校の特別支援学級に在籍している児童の1人1台端末に、動画やドリルで学ぶことができる学習アプリを導入した。学校からは、児童一人一人の実態に応じて、自分に合った教材を選択しながら学習できるようになったとの報告を受けている。このことを踏まえ、令和8年度は、特別支援学級に在籍するすべての児童・生徒の1人1台端末への導入を検討中である。

### 3 自閉症・情緒障害特別支援学級について

(1) 小学校児童数（各年度4月7日時点、令和8年度は見込数）



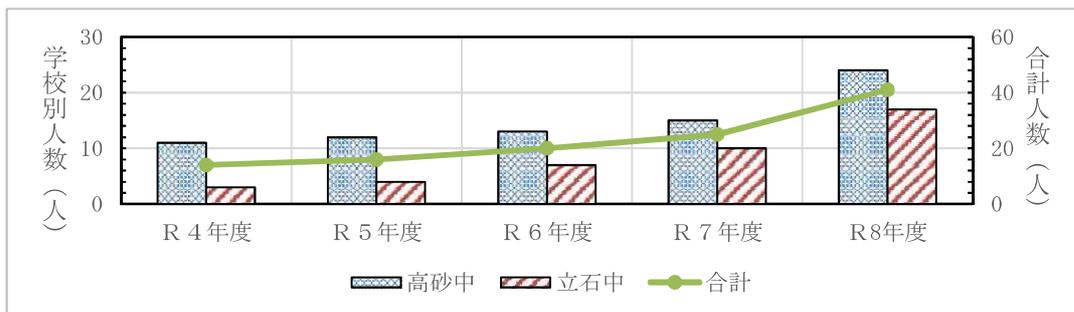
【高砂小学校】 学年別児童数

年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度
2年生	0	0	0	1	1
3年生	1	0	1	1	6
4年生	1	3	3	2	4
5年生	2	0	5	5	5
6年生	1	4	2	6	8
合計(人)	5	7	11	15	24
学級数	1	1	2	2	3

【清和小学校】 学年別児童数（R4年度設置）

年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度
2年生	0	0	0	0	0
3年生	2	1	0	1	1
4年生	1	3	3	2	6
5年生	0	1	3	4	4
6年生	1	1	2	3	4
合計(人)	4	6	8	10	15
学級数	1	1	1	2	2

(2) 中学校生徒数（各年度4月7日時点、令和8年度は見込数）



【高砂中学校】 学年別生徒数

年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度
1年生	4	3	5	6	13
2年生	5	4	4	5	6
3年生	2	5	4	4	5
合計(人)	11	12	13	15	24
学級数	2	2	2	2	3

【立石中学校】 学年別生徒数（R4年度設置）

年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度
1年生	3	1	3	5	8
2年生	0	3	1	4	5
3年生	0	0	3	1	4
合計(人)	3	4	7	10	17
学級数	1	1	1	2	3

参考：自閉症・情緒障害特別支援学級 児童及び生徒数

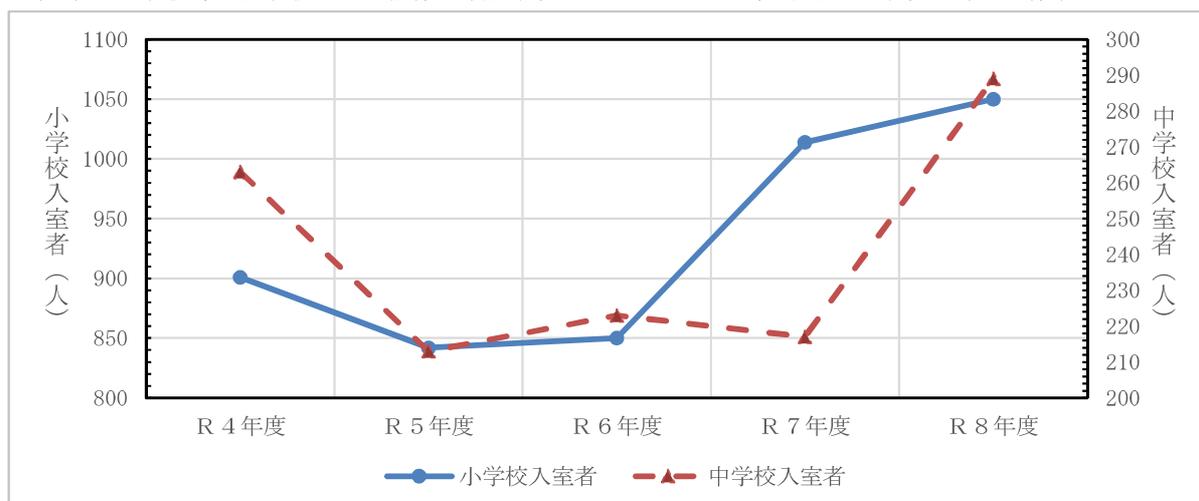
年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度
小学校児童数(人)	9	13	19	25	39
中学校生徒数(人)	14	16	20	25	41

(3) 現状と課題・今後の方向性

- ① 各校とも在籍児童・生徒数は逡増している。高砂小・中学校では、児童・生徒数の増加により教室が不足したため、特別支援教室として使用していた教室を高砂小の特別支援学級の教室として活用することとした。
- ② 令和7年度から、特別支援学級に在籍する児童・生徒の1人1台端末に学習者用デジタル教科書を導入した。学校からは読み上げ機能の活用や補助資料の視聴などにより、児童・生徒の学習に有効であるとの報告を受けている。このため、令和8年度も引き続き導入を予定している。
- ③ 令和7年度の就学相談会から、心理士で大学講師の専門家をコーディネーターとして検討会に招いた。専門的な観点からの助言を受け、検討内容の充実につながった。このため、令和8年度も外部の専門家をコーディネーターとして招くことを検討している。
- ④ 小学校、中学校ともに教員の専門性向上が課題となっている。また、かん黙の児童・生徒や衝動性・多動性の高い児童・生徒など、多様な特性をもつ児童・生徒が同一学級に在籍していることから、教員の負担が大きくなり、学級運営にも困難が生じている。これまでも発達障害についての理解や教科指導に関する研修を実施してきたが、引き続き、研修の充実を図り、教員の専門性向上と負担軽減に繋げていく。
- ⑤ 自閉症・情緒障害特別支援学級の講師等の人的配置については、学校と連携し引き続き必要な人員の確保を図る。
- ⑥ 自閉症・情緒障害特別支援学級への入級を希望する児童・生徒数の増加に伴い、既存の4校の教室数に不足が生じ、これ以上の受け入れが今後困難となる可能性がある。児童・生徒数の推移や需要の見込み、立地や施設の整備も考慮しながら、自閉症・情緒障害特別支援学級の増設について検討する必要がある。

## 4 特別支援教室について

(1) 小学校、中学校入室者数（各年度4月7日時点、令和8年度は見込数）

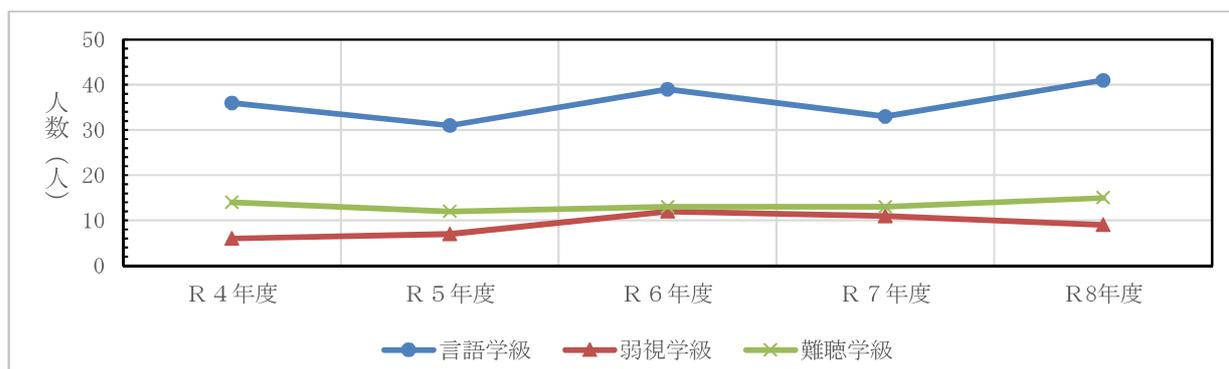


年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度
小学校入室者数(人)	901	842	850	1014	1050
中学校入室者数(人)	263	213	223	217	289

(2) 現状と課題・今後の方向性

- ① 巡回指導教員の負担軽減を図るため、令和7年度より、巡回指導も可能となる「特別支援教室指導講師」の職を新設した。
- ② 令和7年度から、川端小、本田小、東四つ木小、中青戸小の特別支援教室に通室する児童の1人1台端末に、認知機能強化トレーニングアプリを試験導入した。学校からは、学習の習慣化、集中力の持続、前向きに挑戦する姿が見受けられるようになったとの報告を受けている。このことを踏まえ、令和8年度は、小学校全校の特別支援教室に通室する児童の1人1台端末への導入を検討中である。
- ③ 例年、新規入室者数が退室者数を上回る状況が続いているため、特別支援教室の目的や、原則の指導期間の考え方について改めて全校に周知する。

## 5 通級指導学級について



(各年度4月7日時点、令和8年度は見込数)

### (1) 言語学級 (ことばの教室) 児童数

【本田小学校】 学年別児童数

年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度
1年生	3	2	6	3	3
2年生	7	12	13	10	5
3年生	11	4	11	13	7
4年生	7	5	3	4	1
5年生	4	6	4	2	1
6年生	4	2	2	1	0
合計(人)	36	31	39	33	17

【末広小学校】 学年別児童数 (R8年度設置)

年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度
1年生	0	0	0	0	0
2年生	0	0	0	0	6
3年生	0	0	0	0	7
4年生	0	0	0	0	4
5年生	0	0	0	0	1
6年生	0	0	0	0	1
合計(人)	0	0	0	0	19

### (2) 弱視学級児童・生徒数 設置校：住吉小学校、立石中学校

年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度
住吉小学校	4	6	10	9	9
立石中学校	2	1	2	2	0
合計(人)	6	7	12	11	9

### (3) 難聴学級児童・生徒数 設置校：青戸小学校、青戸中学校

年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度
青戸小学校	9	9	9	11	10
青戸中学校	5	3	4	2	5
合計(人)	14	12	13	13	15

### (4) 現状と課題・今後の方向性

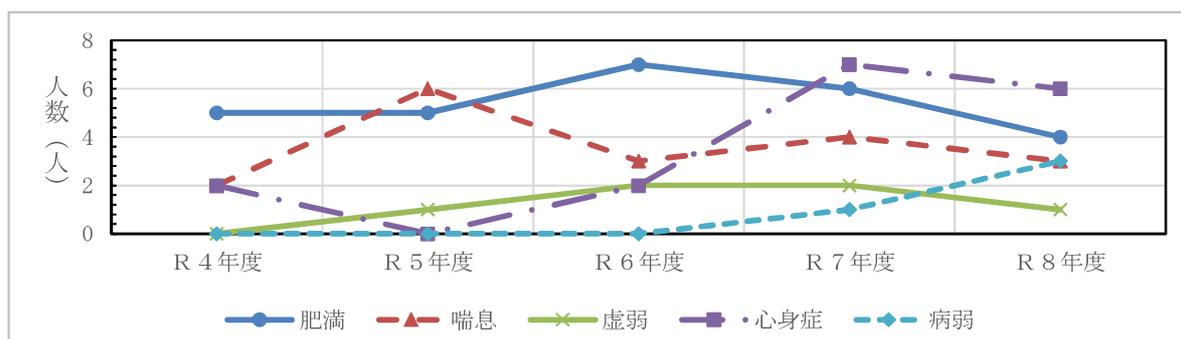
- ① 言語学級への入室希望児童が増加しており、また、区内全域から通学してくることを配慮し、令和8年4月に区内2か所目となる「ことばの教室」を末広小に開設する。そのため、現在通級している児童の保護者に対しては、今後の通級先となる学校について個別に通知を行った。また、「ことばの教室のご案内」リーフレットを作成し、通室対象校や通室手続きの流れ等について各学校へ周知した。現在、末

広小の教室環境の整備を2月末まで、必要物品の購入を3月末までを目途に準備を進めている。

- ② 立石中の弱視学級の移設については、調整に時間を要していたため実施が遅れていたが、移設に向けた環境が整いつつあることから、令和9年度に新たな学校で弱視学級を設置できるよう検討を進めていく。

## 6 区立病弱特別支援学校 保田しおさい学校について

(1) 児童・生徒数（各年度4月1日時点、令和8年度は見込数）



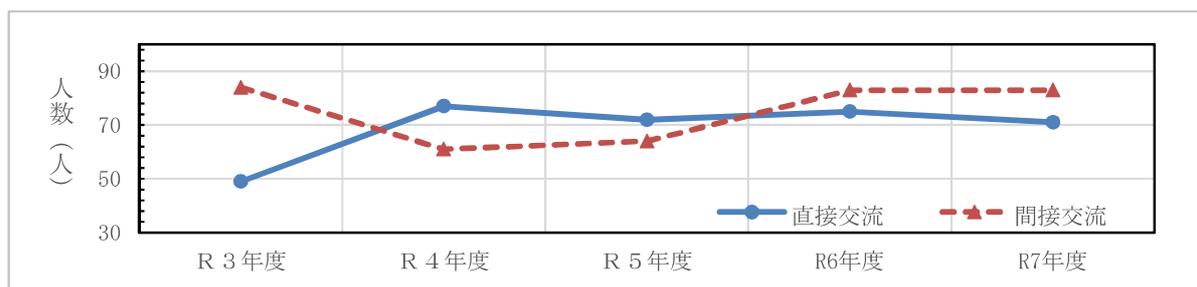
年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度
肥満	5	5	7	6	4
喘息	2	6	3	4	3
虚弱	0	1	2	2	1
心身症	2	0	2	7	6
病弱	0	0	0	1	3
合計(人)	9	12	14	20	17

(2) 現状と課題・今後の方向性

- ① 保田しおさい学校の入校者数は、一時期大きく減少したものの、近年は遡増している。
- ② 保田しおさい学校での学校見学会を、年3回実施している。学校見学会では、実際の校舎や寄宿舎の様子を直接見ることができることから、見学会への参加が入校につながっている。また、見学会の実施時期を、新学期からの入校が円滑に進む時期に設定していることも、入校者数の遡増に寄与していると考えられる。このため、今後も年3回の学校見学会の実施を継続していく。

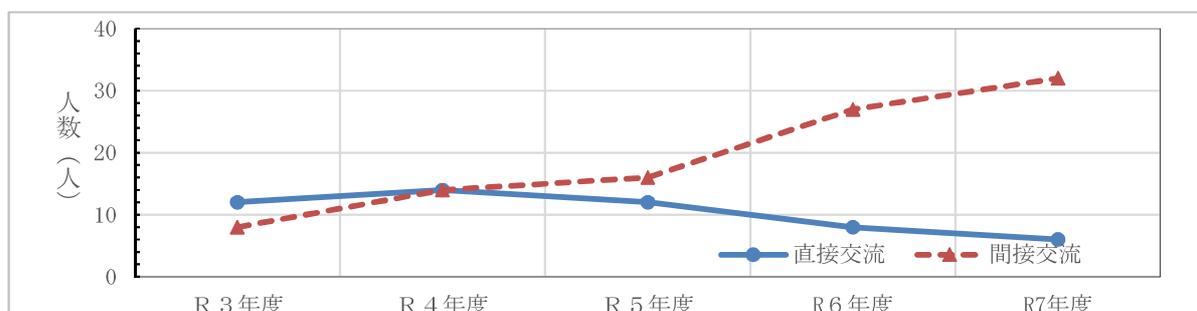
## 7 副籍交流について

(1) 小学校児童数（各年度末時点、令和7年度は令和7年12月1日時点）



年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
直接交流	49	77	72	75	71
間接交流	84	61	64	83	83
合計(人)	133	138	136	158	154

(2) 中学校生徒数（各年度末時点、令和7年度は令和7年12月1日時点）



年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
直接交流	12	14	12	8	6
間接交流	8	14	16	27	32
合計(人)	20	28	28	35	38

(3) 現状と課題・今後の方向性

- ① 令和7年度は、前年度より小学校、中学校ともに間接交流数が増加している。
- ② 近隣の特別支援学校教諭等による副籍実務者連絡会を実施し、各校での副籍実施状況や課題について情報交換を行った。
- ③ 副籍交流の充実を図るため、校園長会で副籍交流の実施について周知している。また、電子メールで情報交換ができる体制を整え、副籍交流の円滑化を図った。
- ④ 副籍交流の内容については、学校間で取組状況にばらつきがあり、実施内容に差がみられる。このため、特別支援教育コーディネーター研修等を通じて、交流内容の質の向上を図っていく。

## 8 医療的ケアについて

(1) 葛飾区立学校での在籍数（各年度4月1日時点、令和8年度は見込数）

年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度
幼稚園	1	1	0	0	0
小学校	3	2	3	4	4
中学校	0	0	0	0	0
合計（人）	4	3	3	4	4

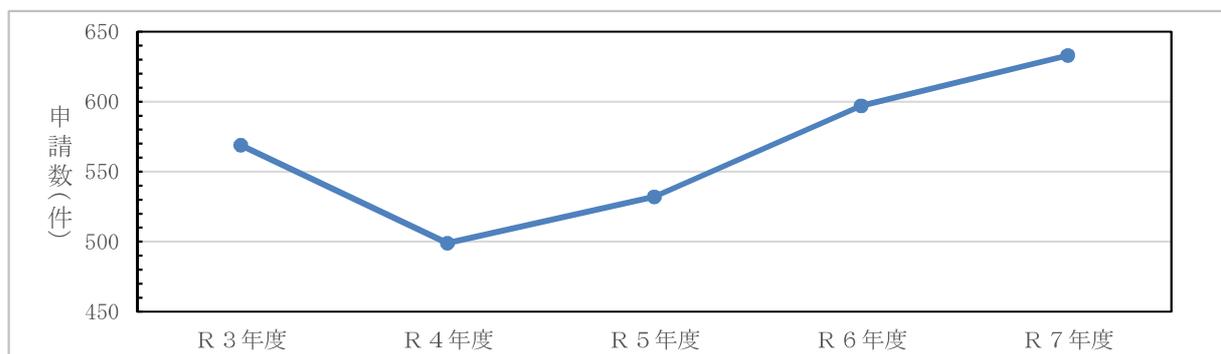
(※令和8年度の医療的ケアの内訳：日常的酸素管理1人、導尿1人、気管切開によるたんの吸引2人)

(2) 現状と課題・今後の方向性

- ① 派遣看護師の学校看護師連絡会への参加を要請したことにより、派遣看護師のみが勤務する学校の医ケア児の状況や、医療的ケアの実施状況を把握している。
- ② 今後も派遣看護師の活用等により看護師を安定的に確保し、医療的ケアの実施体制の充実を図る。
- ③ 医療的ケア児が今年度、水泳学習への参加を希望したが、介助員の確保が課題となった。今後は、希望があった際に介助員を配置できるよう、体制整備に向けた検討を進めていく必要がある。

## 9 知能検査、アイリスシート（学齢期版支援シート）について

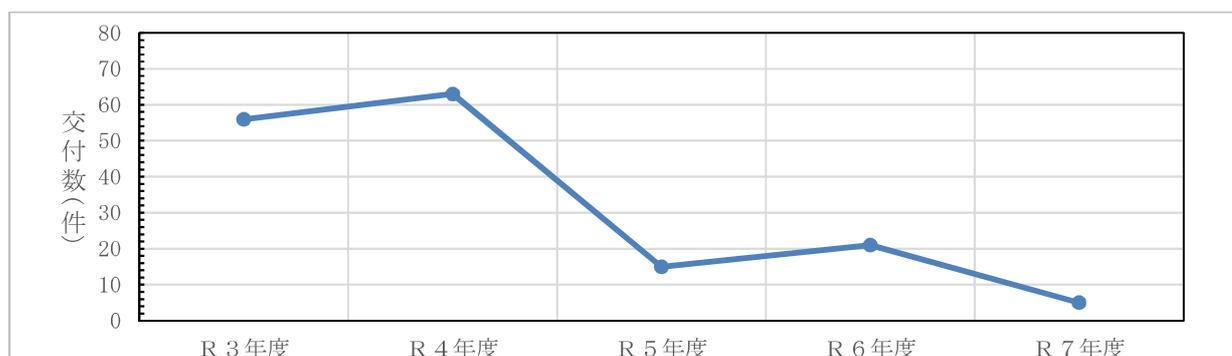
(1) 知能検査申請数（各年度末時点、令和7年度は令和7年12月12日時点）



年度	R 3年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度
申請数(件)	569	499	532	597	633

(2) アイリスシート学齢期版支援シート交付数

(各年度末時点、令和7年度は令和8年1月1日時点)



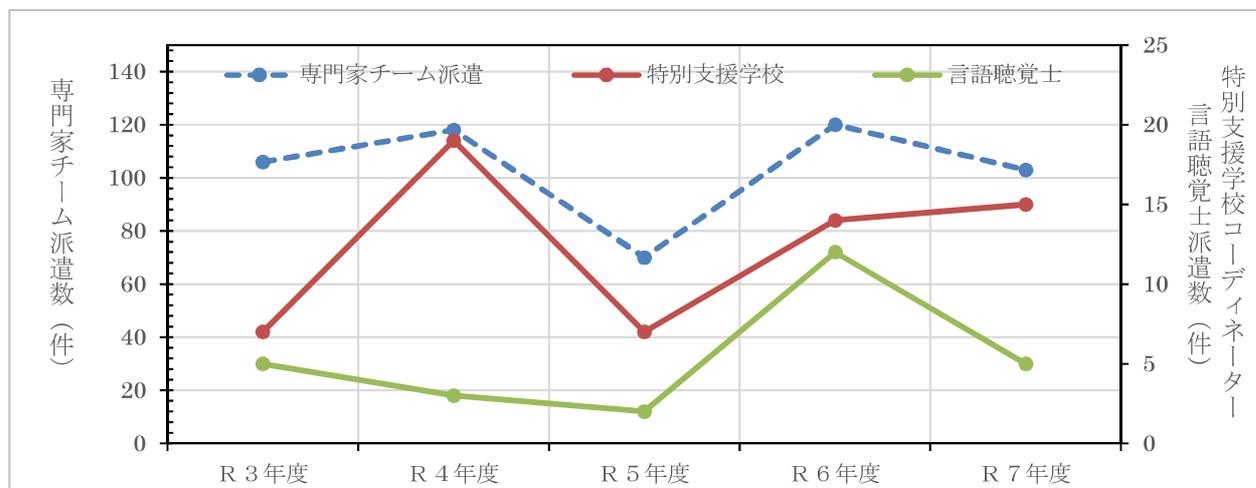
年度	R 3年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度
交付数(件)	56	63	15	21	5

(3) 現状と課題・今後の方向性

- ① 令和6年度に心理検査申請数が大幅に増加したことから、令和7年度から心理専門員を増員するとともに、申請スケジュールの見直しを図った。しかし、申請数は前年度より増加していることから、繁忙期の緩和に向けた検討を引き続き行っていく。
- ② 知能検査の精度向上のため、令和7年度から、WISC-V及び田中ビネーVIを新たに導入し、よりきめ細やかな支援に繋げている。
- ③ アイリスシートの交付数が大幅に減少している。今後、学校や保護者の活用状況を把握し、アイリスシートの今後のあり方について検討する。

## 10 専門家チーム派遣、支援会議実績について

(1) 専門家チーム派遣事業件数（各年度末時点、令和7年度は令和8年1月1日時点）

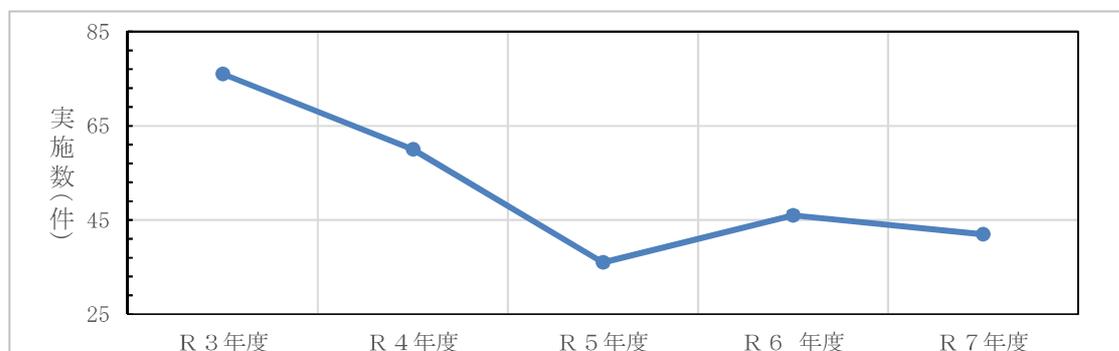


年度	R 3年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度
専門家チーム派遣数 (件)	106	118	70	120	103
特別支援学校コーディネーター派遣数 (件)	7	19	7	14	15
言語聴覚士派遣数 (件)	5	3	2	12	5

※専門家チーム派遣数には、特別支援学校コーディネーター派遣数と言語聴覚士派遣数を含む。

(2) 支援会議参加件数（ケース会議含む）

（各年度末時点令和7年度は令和8年1月1日時点）



年度	R 3年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度
実施数 (件)	76	60	36	46	42

※上記（1）専門家チーム派遣数には支援会議実施数を含む。

(3) 現状と課題・今後の方向性

- ① 学校が抱える課題が多様化していることから、これまでとは違った専門的視点からの支援に繋げるため、専門家チームに作業療法士を新たに加えることを検討中である。
- ② 支援会議参加件数は前年度と比較し増加傾向である。引き続き、学校、保護者に対し適切な助言を行っていく。
- ③ 専門家チーム派遣事業の活用手順や活用事例を周知するため、事業リーフレットを作成し、更なる活用の促進を図る。

## 11 多層指導モデル（デジタル版MIM）について

### （1）実施内容

令和4年度から、すべての区立小学校の1年生及び特別支援教室に導入。令和5年度からは小学校全校に導入し、タブレット端末を活用して実施している。

### （2）現状と課題・今後の方向性

- ① 学校によって、デジタルMIMの活用状況にバラつきがあるため、利用実績が少ない学校へ、引き続き活用を促していく。
- ② 新たに導入したデジタル教材と両立させながら活用するよう促していく。

## 12 デジタル教材について

### （1）令和7年度試行導入実績

	① 認知機能強化 トレーニングアプリ	② デジタル教科書	③ 学習補助アプリ
対象	特別支援教室 (小学校のみ)	自閉症・情緒障害 特別支援学級	知的障害 特別支援学級
導入学校数	小学校：4校 ※対象校の一部に導入	小学校：2校 中学校：2校 ※対象校全校に導入	小学校：3校 ※対象校の一部に導入
教材内容	記憶・言語理解・知覚等の土台となる認知機能を高めるためのトレーニングを提供する。	紙の教科書の内容に加えて、音声読上げ機能や動画教材等が付与されている。	アニメーションや音声を活用した教材により、反復学習を含めた効果的な学びをサポートする。
目的	学習の質や自己効力感の向上を目指す。	児童・生徒の抱える学習上の困難さを軽減する。	一人一人の理解度に合わせた学習の場を提供する。

### （2）現状と課題・今後の方向性

- ① 令和7年度はデジタル教材の試行導入を行い、各導入校の試行導入における効果検証を行った。対象校の一部に導入した教材については、効果検証の結果を踏まえ、令和8年度に対象校全校の導入を検討中である。
- ② 学校や担任の間で利用実績に差異があることから、導入時のフォローアップを含めた教材の使用方法、活用方法、活用によるメリット等を引き続き周知していく。

## 13 ペアレントトレーニングについて

### (1) 応募状況

年度	R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度
定員(人)	6	6	10	25
回数(回)	1	2	2	2
応募者数(人)	30	28	39	36
倍率	5.0	2.3	1.9	0.7

### (2) 現状と課題・今後の方向性

- ① 令和4年度の事業実施当初から定員を上回る応募があったことから、令和6年度から業務を外部事業者へ委託し、定員を増やして実施した。しかし、令和6年度も定員を上回る応募状況が続いたため、令和7年度はさらに定員を増やしたが、応募者数が定員を下回った。今後、より多くの保護者が参加できるよう、周知方法や実施方法等の見直しを検討していく。
- ② 令和7年度までは区立小学校の特別支援教室を利用している1年生から3年生までの保護者を対象としていたが、令和7年度に実施した保護者向けニーズ調査の結果から、4年生から6年生までの保護者にも高いニーズがあることが明らかになった。令和8年度は、保護者の満足度向上を目指し、対象学年の拡大を検討中である。

## 令和7年度 葛飾区特別支援教育に関する研修

### 目的

特別支援教育の充実のため、研修内容の見直しを図ることで、教職員が研修を通じて、特別支援教育の基礎的な知識・技能を身に付けるとともに、専門性を向上させるようにする。

### 令和6年度課題

- 特別支援学級や巡回指導教員、特別支援教育コーディネーターは、特別支援教育の重要な担い手であり、その専門性が校内の他の教員に与える影響も極めて大きい。このため、専門的な研修の受講等により、研修を通し、専門性の向上を図ることが必要である。
- 東京都立特別支援学校と連携し、特別支援学校のセンター的機能を生かし、研修内容を充実する必要がある。
- 研修の実施方法を見直し、集合研修だけでなく、オンラインやオンデマンド研修の活用を検討する必要がある。

### 1 特別支援教室巡回指導教員研修（対象：拠点校巡回指導教員）

実施月日	内容	対象者数	受講実績
7月15日(火)	・特別支援教室巡回指導教員に求められる専門性 【講師】町田市教育センター特別支援教育・人材育成アドバイザー ビジョンアセスメントトレーナー 丸 節子 氏	96人	65人
12月19日(金)	・発達が気になる子どもの運動・感覚特性と支援 発達性協調運動症(DCD) 【講師】東京家政大学 健康科学部リハビリテーション学科 作業療法士 東恩納 拓也 氏		48名

### 2 特別支援教育コーディネーター研修（対象：特別支援教育コーディネーター）

実施月日	研修内容・講師等	対象者数	受講実績
4月18日(金)	・特別支援教育コーディネーターに期待される役割について ・特別支援教室訪問の実施について ・就学相談について ・発達検査について ・副籍について ・「見え方」相談会について 【講師】担当指導主事、専門家チーム、特別支援教育係 都立特別支援学校特別支援教育コーディネーター	73人	73人
9月16日(火)	・特別支援教育コーディネーターによる校内支援体制の充実について 【講師】東京都立水元特別支援学校 特別支援教育コーディネーター 佐藤 美紀 氏	73人	72人

### 3 特別支援教育基礎研修会（対象：教員経験年数6年以内の教員）

実施月日	内容	対象者数	受講実績
7月7日(月)	・児童・生徒の特性に応じた指導・支援の工夫 ～インクルーシブ教育の推進に向けて～ 【講師】東京都教職員研修センター 篠崎 友誉 氏	73人	61人
10月17日(金)	・児童・生徒の特性に応じた指導・支援の工夫 ～児童・生徒のアセスメントと指導～ 【講師】東京都教職員研修センター 篠崎 友誉 氏	73人	79人

#### 4 知的障害特別支援学級教員研修

(対象：知的障害特別支援学級 教諭・主任教諭・主幹教諭)

特別支援学級担当の教員ではない教員の方の参加も可能とする)

実施月日	内容	対象校数	受講実績
7月24日(木)	・学校見学(水元特別支援学校) 【講師】水元特別支援学校コーディネーター佐藤 美紀 氏	77人	51人
11月18日(火)	・特別支援学級の授業におけるタブレット端末の活用について 【講師】総合教育センター教育支援課 担当指導主事		12人

#### 5 自閉症・情緒障害特別支援学級教員研修

(対象：自閉症・情緒障害特別支援学級 教諭・主任教諭・主幹教諭)

実施月日	内容	対象校数	受講実績
7月22日(火)	・自立活動の指導の観点を生かした教科指導について 【講師】中野特別支援学校 主幹教諭 日高 浩一 氏	4校	3校

#### 6 特別支援教室専門員研修 (対象：特別支援教室専門員)

実施月日	内容	対象者数	受講実績
4月14日(金) オンデマンド	・葛飾区の特別支援教室について ・特別支援教室専門員の役割について ・特別支援教室に関わる一年間の流れについて 【講師】担当指導主事、専門家チーム、特別支援教育係	72人	72人
9月6日(金)	・1学期の振り返りと改善に向けて ・拠点別情報交換(協議・発表) 【講師】担当指導主事、専門家チーム	72人	65人

#### 7 特別支援教室教育課程編成説明会 (対象：特別支援教室教育課程編成に関わる教員)

※各校1名および特別支援教室拠点校各校1名

実施月日	内容	対象校数	受講実績
1月15日(火) オンライン	・特別支援教室教育課程編成におけるポイントについて ・特別支援教室に関する提出書類について 【講師】担当指導主事、専門家チーム	73校	63校

#### 8 クラス支援員研修 (対象：クラス支援員 小学校49校、中学校10校)

実施月日	内容	対象者数	受講実績
4月8日(月) オンデマンド	・「特別支援教育」 ・「特別支援教育総論 学習のユニバーサルデザイン・段階的対応・合理的配慮」	70人	55人

### 成果

- 「クラス支援員」をはじめ、様々な職種・職層の教職員に対して、研修を実施し、基礎的・実践的な知識・技能の向上を図ることができた。
- 東京都立特別支援学校と連携した研修を実施し、専門性の向上を図るとともに、特別支援学校で行われている児童・生徒への特性に応じた配慮事項や環境整備等について理解を深めることができた。

## 課題

- 今後も様々な職種・職層の教職員が研修する機会を確保し、特別支援教育の基礎的な知識・技能を身に付けるとともに、専門性の向上を図る必要がある。また、生活スキルアップ指導補助員等の研修を実施していない職種の研修について検討する。
- 特別支援に関わる職員は勤務形態が様々であることから、多様な働き方の職員に対応した研修の実施を検討する。

## 令和8年度の方向性

目的	内容
特別支援教育の研修内容の充実	特別支援学級の教員の授業力向上に向けて、外部講師による研修会を設定する。
オンデマンド研修の充実	特別支援教室専門員研修(オンデマンド研修)の内容を専門家チームと連携して検討し、専門性の向上を図る。
生活スキルアップ指導補助員の研修の実施	新規に、研修を2回設定する。 1回目は、年度当初に仕事内容や配慮すべき事柄を学ぶ対面研修を実施し、生活スキルアップ指導補助員としての基礎知識を身に付ける。 2回目は、オンデマンドを活用し、専門性の向上を図る内容で実施する。

# 令和 7 年度 各検討部会における課題と方向性

## 1 特別支援教育専門性向上検討部会

(1) 検討事項（特別支援教育専門性向上検討部会設置要領より）

<p>第 2 条 検討部会は、次の事項について検討する。</p> <p>(1) 特別支援学級（知的障害及び自閉症・情緒障害）における専門性の向上</p> <p>(2) 通級指導学級（難聴・言語障害・弱視）における専門性の向上</p> <p>(3) 特別支援教室における専門性の向上</p> <p>(4) 院内学級（病弱・虚弱学級）・区立特別支援学校（病弱・虚弱特別支援学校）における指導・支援の充実</p> <p>(5) その他必要な事項</p>
---

(2) 開催日時

第 1 回：令和 7 年 7 月 25 日（金）午前 10 時～午前 11 時 30 分

第 2 回：令和 7 年 12 月 4 日（木）午後 2 時～午後 3 時 30 分

会 場：いずれも総合教育センター

(3) 課題と方向性

	項目	課題	方向性
①	自閉症・情緒障害特別支援学級の課題と今後の方向性	▶入級児童・生徒の増加により、今後、既存の 4 校において、キャパシティの不足により、これ以上の受け入れが困難になる可能性がある。	▶児童・生徒数の推移や需要の見込み、立地や施設の整備も考慮しながら、自閉症・情緒障害特別支援学級の増設を検討する必要がある。
②	専門家チーム派遣事業の充実	▶活用していない学校では、事業の活用方法等が学校に認識されていない。 ▶学校が抱える課題が多様化していることから、求められる活用範囲や新たな専門職の配置について検討が必要である。	▶活用事例等も紹介するなど、あらためて学校へ事業の周知を行い、活用の促進を図る。 ▶新たな専門職として、作業療法士の活用を検討する。
③	特別支援教室の指導期間について	▶特別支援教室に通室している児童・生徒の退室者数が年々減少し、一方で通室年数が 3 年目以上の児童・生徒数の割合が増加している。	▶「特別支援教室の目的」や「原則の指導期間の考え方」について改めて各校へ周知し、各校での定期的な指導の振り返りと、在籍学級と連携した実効性のある指導成果の評価及び継続・退室等の検討を促す。

## 2 特別支援教育環境改善検討部会

(2) 検討事項（特別支援教育環境改善検討部会設置要領より）

第2条 検討部会は、次の事項について検討する。

- (1) 医療的ケアを含む合理的配慮の取組に関すること。
- (2) インクルーシブ教育システムの推進に関すること。
- (3) その他必要な事項

(1) 開催日時

第1回：令和7年8月27日（金）午前10時～午前11時

第2回：令和7年12月4日（木）午前10時30分～午前11時30分

会場：いずれも都立水元小合学園

(2) 課題と方向性

項目	課題	方向性
特別支援教育における作業療法士の活用	▶発達障害等のある児童・生徒等の割合の増加に伴い、学校が抱える課題が多様化している。	▶専門家チーム派遣事業において作業療法士を新たに活用し、感覚や運動面の視点から支援方法等を助言する。 ▶作業療法士に期待できる支援について分かりやすく周知し、活用の促進を図る。
生活スキルアップ指導補助員研修の実施	▶生活スキルアップ指導補助員向けの研修を実施していない。	▶対面及びオンデマンドによる生活スキルアップ指導補助員向けの研修を実施する。 ▶支援が必要な児童・生徒等の障害種別に応じた対処方法を学び、職務における専門性の向上を図る。

※検討部会では上記課題の検討のほか、現在、区立学校で実施されている医療的ケアの実施状況について検討を行った。

## 令和8年度 葛飾区特別支援教育推進委員会の年間予定

	特別支援教育 推進委員会	特別支援教育 専門性向上検討部会	特別支援教育 環境改善検討部会
4			
5			
6	<b>第1回推進委員会</b> <b>(令和8年6月開催予定)</b> ○令和7年度特別支援教育 事業の取組状況 ○特別支援教育に関する研 修について 他		
7		<b>第1回部会</b> <b>(令和8年7月開催予定)</b> ○組織・年間計画 ○検討・協議	
8			<b>第1回部会</b> <b>(令和8年8月開催予定)</b> ○組織・年間計画 ○検討・協議
9			
10			
11		<b>第2回部会</b> <b>(令和8年11月開催予定)</b> ○進捗状況報告 ○令和9年度に向けて	
12			<b>第2回部会（又は医療的ケ            ア判定審査会）</b> <b>(令和8年12月開催予定)</b> ○進捗状況報告 ○令和9年度に向けて
1	<b>第2回推進委員会</b> <b>(令和9年1月開催予定)</b> ○各部会報告 ○令和8年度の取組状況 他		
2			
3			

# 令和7年度 第2回 葛飾区特別支援教育推進委員会議事録（要旨）

## 開催日時

令和8年1月28日（水）午前10時から 正午

## 開催場所

葛飾区立総合教育センター大研修室

## 協議・報告事項

- (1) 葛飾区特別支援教育事業の取組状況について
- (2) 葛飾区特別支援教育に関する研修について
- (3) 各検討部会における課題と方向性について
- (4) 令和8年度葛飾区特別支援教育推進委員会について

## 出席委員（17名）

山梨委員長、河村副委員長、早川委員、加藤委員、高橋（広）委員、高橋（龍）委員、渡邊委員、兼子委員、姫野委員、野口委員、林委員、中安委員、大石委員、尾崎委員、富里委員、大倉委員、杉山委員

## 欠席委員（5名）

玉木委員、塚田委員、竹内委員、小池委員、村山委員

## 配付資料

- |     |                           |
|-----|---------------------------|
| 資料1 | 令和7年度 葛飾区特別支援教育推進委員会名簿    |
| 資料2 | 令和7年度 葛飾区特別支援教育事業の取組状況    |
| 資料3 | 令和7年度 特別支援教育に関する研修        |
| 資料4 | 令和7年度 各検討部会における課題と方向性     |
| 資料5 | 令和8年度 葛飾区特別支援教育推進委員会の年間予定 |

## 1 開会

<委員長> 開会のあいさつ

## 2 委員紹介

<事務局> 委員の紹介

## 3 議題

- (1) 葛飾区特別支援教育事業の取組状況について

<事務局>

資料2 令和7年度 葛飾区特別支援教育事業の取組状況 に沿って一括しての説明

<委員長>

事務局からの報告内容について、ご意見、ご質問があればお願いしたい。

## <委員>

1点目に、3ページ目：(3)引継ぎ会申込数について、特別支援教室の利用希望者は増加傾向にあると思うが、なぜ引継ぎ会の申込数が減っているのか、理由を伺いたい。

2点目に、特別支援教室の利用者数が増加しているということで、卒業生や退室者の人数が想定ほど多くないからではないかと考えている。退室後の支援は量や質を徐々に軽くして支援を減らしていくイメージだと考えており、保護者に向けて次の支援の見通しや計画、代替となる支援の紹介や説明を行い、今後のイメージを持ってもらうことで、安心して退室できるのではないかと感じた。そこで、特別支援教室を退室する際の面談でどのような話をしているか、可能な範囲で内容を伺いたい。

## <事務局>

まず引継ぎ会について、実施方法には、保護者がお子さんの困りごとについて書面のみで実施する場合、保護者と学校が電話で直接お子さんの状況を話しながら実施する場合、さらに保護者とお子さんが学校に出向いて実際に面談する場合の3種類がある。これらのうち、内訳として書面のみでの申し込みによる提出の保護者が減少しており、電話や面談での実施は例年どおりの件数となった。さらに、申込件数が減った理由としては、申し込み方法が紙申請から電子申請（以下 Logo フォーム）に変わったことが大きく関係しているのではないかと分析している。従来は、学務課から送付される就学通知書の中に引継ぎ会の申込書が同封されており、就学予定校に引き継ぎたい事柄がある場合には申込書に記入をして返送していた。今回は申込書を同封せず Logo フォームの申込みとなったため、紙での申込件数が減少したと捉えている。

続いて、特別支援教室を退室した後の支援については、校内委員会で特別支援コーディネーターを中心に、学級や学年での共有を行い、校内で継続して支援している。

## <委員>

引継ぎ会の申込数については、電子申請化によって件数が減少したことに対する対応が必要だと思うので、検討いただきたい。

特別支援教室を退室した後の支援については、退室時に保護者へ支援を紹介した上で継続支援をしているということか。

## <事務局>

おっしゃるとおり。特別支援教室での指導自体は退室すると終了となるが、担任が指導状況を確認して、対象児童・生徒の様子を観察したり、巡回指導教員が様子を観察したり、さらに担任と保護者が定期的に面談を行ったりして情報を共有している。補足として、総合教育センターでは全ての小学校にクラス支援員を配置しており、発達障害等のある児童・生徒に対する支援を行っている。また、必要に応じて専門家チーム派遣も行っており、特別支援教育に係る専門家の視点から支援方法の助言をしたり、さらには心理士等の派遣をしたりと、様々な仕組みを活用して各校と情報共有をしながら、より良い支援について考えている。

## <委員>

専門家チーム派遣は、特別支援教室退室後の支援として、保護者要望で利用できるものか。

## <事務局>

教員が児童・生徒の様子を観察した上で、学校要望で申請するものである。

## <委員>

特別支援教室には、通室指導が必要でなかなか退室ができない児童・生徒と、もう少しで退室ができて、通常学級で何とか頑張っていける児童・生徒が在籍していると思う。もし次のステップとなる支援に関する具体的なイメージがつけば保護者の安心につながり、退室者が増えるかも

しれないと感じた。保護者面談で退室後の具体的な支援プランを示せると良いと思う。

#### <委員長>

その他いかがか。

#### <委員>

1点目に、3ページ：就学相談(1)就学相談受付数について、令和7年度の受付数が485件ということで、1月1日時点では令和6年度より少ない件数となっているが、先ほどの説明では今後増加し、最終的には令和6年度の件数を上回る見込みとのことだった。これは、4～5ページに掲載されている知的障害特別支援学級の令和8年度児童・生徒数の見込みが増加していることを踏まえての予測という理解でよいか。

2点目に、8ページ：自閉症・情緒障害特別支援学級(3)現状と課題・今後の方向性④について、「小学校、中学校ともに教員の専門性の向上が課題となっている」との記載がある。特性や支援の幅が大きくなることで教員の負担が大きくなるという話は、特別支援学校にも当てはまるが、そこに対応するのが教員の使命だとも思っており、その部分について子どもの指導を負担と捉えていいのかというところは疑問が残る反面、対応に苦慮するという部分については同意である。最終的に、これらの課題に対応するため専門性向上につなげていくとあるが、具体的にどのようなことを検討しているか伺いたい。

3点目に、9ページ：特別支援教室(2)現状と課題・今後の方向性②について、令和8年度は全小学校の特別支援教室に通室する児童の1人1台端末の導入を検討中と記載があるが、既に導入されている1人1台端末に加え、通室者へさらに1台端末を導入するという意味か。1人1台端末は国の施策で導入が進められており、既に通常学級へ導入されている認識であるため、確認のため伺いたい。

4点目に、10ページ：通級指導学級(2)弱視学級児童・生徒数について、立石中学校の弱視学級が令和8年度0名と記載されているが、令和7年度に在籍している2名の生徒はどのような対応になるのか伺いたい。また、(4)現状と課題・今後の方向性の②に、「令和9年度に新たな学校で弱視学級を設置できるよう検討を進めていく。」と記載があるが、令和9年度はどの学校へ開設予定なのか、もし決まっていれば伺いたい。

5点目に、17ページ：ペアレントトレーニングについて、例年は応募者が定員を上回っていたが、令和7年度には定員数を割ったという記載がある。これは希望者が全員講座を受けられたということで、課題ではなく区の成果として捉えてもよいのではないかと思うが、「より多くの保護者が参加できるよう、通知方法や実施方法等の見直しを検討していく。」と記載があるということは、区としてはまだまだ現状について課題があるというような認識なのか。考察の方向性について確認したい。

#### <事務局>

まず始めに、就学相談件数について回答させていただく。令和7年度の485件という数字は1月1日現在での情報を記載しているが、就学相談の受付は特別支援学級が1月末、保田しおさい学校が2月末まで続いており、本日(1月28日)時点で既に受付数が560件に達しているため、令和6年度よりも上回る件数と報告している。

続いて、自閉症・情緒障害特別支援学級の教員に係る専門性向上について回答させていただく。具体的な取組としては、毎年都立特別支援学校の教員をお招きして研修を実施しているため、そちらを引き続き実施していく予定である。併せて、児童・生徒の指導が教員の負担となると記載した点について補足させていただく。自閉症・情緒障害特別支援学級は通常学級の教育課程に準ずることになっているため、各学年で各教科の勉強をしている。そうすると、例えば2学

級の場合は3名の教員がそれぞれ学年別に授業を行っており、そこに講師も入って授業を進めるが、そこで誰か一人がパニックを起こして教室内にいられなくなった場合、その児童・生徒に大人がつくのが人的に難しくなる。従って、指導が負担というよりは、個別対応という面で、人的負担が大きくなっていると捉えている。

続いて、特別支援教室の通室者に向けた認知機能強化トレーニングアプリの導入について回答させていただく。こちらは新たな端末の貸与はなく、既に通常学級で貸与されている1人1台端末を使用し、特別支援教室を利用している対象児童だけがアプリ形式で学習できるよう環境を整える予定である。

続いて、立石中学校の弱視学級について回答させていただく。現在在籍している2名については3月に卒業を予定しており、かつ新たに入級する見込みがないため、来年度は一旦0名としている。また、新たに弱視学級を設置する学校については、別途改めて報告させていただく。

最後に、ペアレントトレーニングの考察について回答させていただく。現在ペアレントトレーニングは平日の午前2時間の枠で実施しているが、曜日や時間帯によって参加ができない保護者も居るのではないかと考えている。そこで、実施方法を変更することで、これまで参加が難しかった保護者のニーズにも応えられるよう今後検討していきたいということで記載した。

#### <委員長>

その他いかが。

#### <委員>

13 ページ：医療的ケアについて、保育園での医療的ケア児の人数を把握しているか伺いたい。幼稚園と同様に保育園でも申請ができるため、今後園児が進学していく中でケースの増加が予想される。先々の見通しを立てる上で、保育園の情報もあつた方が検討しやすくなると思う。

#### <委員>

公立保育園については4園5名が医療的ケア児として入所している。令和8年度の人数はこれからの把握になるが、令和7年度と同程度の人数と考えている。

#### <委員長>

その他いかが。

#### <委員>

デジタル教材の活用について、国語の教科書を読み書き障害のある子どもの補助教材として使う取組があるか伺いたい。また、先ほどペアレントトレーニングでオンラインやオンデマンドの活用に関する話があつたが、きちんと効果を上げるためには、オンデマンド形式での実施は難しいかと思っているため、意見としてお伝えさせていただく。

#### <事務局>

自閉症・情緒障害特別支援学級で導入しているデジタル教科書は、音読機能も付いているため、読み書きが苦手な児童・生徒でも音声を聞きながら授業ができると考えている。

#### <委員>

通常学級でも読み書き障害がある児童・生徒は多く在籍していると思うが、その子たちに向けた国語の補助教材として、教科書の読み上げ機能を活用した指導を行っているか伺いたい。

#### <事務局>

国語のデジタル教科書は、現在自閉症・情緒障害特別支援学級にしか導入をしていないため通常学級での活用が難しいが、英語については全ての児童・生徒のタブレットに入っており、算数・数学は半数の児童・生徒のタブレットに入っているため、活用が可能である。また、読み書き障害とは異なるが、読みの指導としてデジタルMIMも導入しているため、活用の余地がある

と考えている。

#### <委員>

通常学級に在籍している児童・生徒で、知的障害はないものの、ディスレクシアと呼ばれる読みに関する困難さがあるため結果として学力が下がり、高学年になると様子が変わることがある。やはり国語という母国で最もメジャーな言語に対して手厚い支援をしないと思考力が育たないと思う。ディスレクシアが見られない児童・生徒は音読の宿題が出て、繰り返し読むことで言語力や国語力、語彙力を増やしていくと思うが、ディスレクシアの児童・生徒が学校の授業だけで内容をカバーすることが難しく、音読でも文字から音に変換することが難しいため内容の理解にまで及ばず、どんどん学年相応の理解に追いつかなくなると思う。少なくとも皆と同じ教材の内容を聞き、読むことは難しくても内容は理解できるという環境につなげていけると良いと思う。

#### <事務局>

今委員からいただいたご意見はそのとおりだと思っており、通常学級の中に在籍している発達障害の可能性がある児童・生徒への支援は課題であると認識している。今後は、ディスレクシアを含めて支援が必要な児童・生徒がどれくらい在籍しているか、またデジタル教科書の効果がどれくらいあるかしっかり研究していきたいと考えている。また、先ほど頂いたペアレントトレーニングの実施方法も併せて検討していきたい。

#### <委員長>

その他いかが。

#### <委員>

通常学級での支援については話をする機会があるが、卒園時に引き継がれる資料を見ると、予想以上に苦しんでいる子どもが多いと感じる。例えば、HSC（ハイリー・センシティブ・チャイルド）やHSP（ハイリー・センシティブ・パーソン）のように、生活や学習に支障がなくても、ちょっとしたことで戸惑ったり、人の前で着替えられなかったりするなど、敏感な子どもが多くなっていると感じる。こういった分野の支援や理解がとても重要だと思うが、何か新たな支援や今後の構想、計画があるか伺いたい。

#### <事務局>

通常学級でのそういった支援については、特別支援コーディネーターや学級の担任、学年の教員等が対象児童・生徒の困りごとについて事例を出し合い配慮事項を決定している。

#### <委員>

教員の厳しい一言で学校に行けなくなってしまうケースがあるため、専門性の向上だけでなく、一人一人の子どもに合わせた配慮を心掛けることで、子どもの受け止め方も大きく変わると思う。感想として述べさせていただく。

#### <委員長>

その他いかがか。質問がないようなので、次に進める。

### (2) 葛飾区特別支援教育に関する研修について

#### <事務局>

資料3 令和7年度 葛飾区特別支援教育に関する研修 に沿って一括しての説明

#### <委員長>

事務局からの報告内容について、ご意見ご質問があればお願いしたい。

#### <委員>

現地集合で研修を行うとどうしても参加人数を絞らざるを得ないため、オンラインやオンデマンドによる研修が進むのは喜ばしいことだと思う。基礎研修も内容が充実しており、私も研修を受けることで既存の知識の理解につながったり、新しい知見が入ったりして勉強になることが多いため、経験が長くて教育現場が好きな教員に研修の機会が広まることは望ましいと思う。

<委員長>

その他いかがか。質問がないようなので、次に進める。

(3) 各検討部会における課題と方向性について

<事務局>

資料4 令和7年度各検討部会における課題と方向性 に沿って一括しての説明

<委員長>

事務局からの報告内容について、ご意見ご質問があればお願いしたい。

質問がないようなので、次に進める。

(4) 令和8年度 葛飾区特別支援教育推進委員会について

<事務局>

資料5 令和8年度 葛飾区特別支援教育推進委員会の年間予定 に沿って一括しての説明

<委員長>

事務局からの報告内容について、ご意見ご質問があればお願いしたい。

質問がないようなので、次に進める。

4 その他

<委員長>

最後に、本日の委員会全体を通して、副委員長からご講評をいただきたい。

<副委員長>

貴重な議論を重ねていただき、大変勉強になった。私からは本日挙げた話を中心に感想と意見をいくつか述べさせていただきます。

1点目に、自閉症・情緒障害特別支援学級について述べたい。元々自閉症・情緒障害特別支援学級は、性質の異なる要素を含んだ支援環境として開設された経緯がある。以前は情緒障害に向けた学級であったが、そこに自閉症が対象として加わり、発達障害に位置づけられる自閉症と、心理的な要因に基づく場面緘黙等の障害という、指導内容や方法が異なる対象が1つにまとまったことで、多様な児童・生徒が在籍している状況である。ここで改めて自閉症・情緒障害特別支援学級の経緯を認識しておかないと、心因性の障害を持つ児童・生徒に対して、自閉症の児童・生徒と同じ内容・方法で支援を行ってしまうと、指導の効果も上がらず、個々の特性に応じた指導ができるという学級の存在意義が損なわれてしまう。先ほど、希望者の増加による自閉症・情緒障害特別支援学級の増設を検討すると報告が挙がっていたが、単に学校を増設するだけでなく、それぞれの学級の中で心因性の情緒障害を持つ児童・生徒と、発達障害として自閉症の特性を持つ児童・生徒に対して、方法や内容を分けて指導できる体制を作ることが大きな課題だと思っている。特に、心因性の障害を持つ児童・生徒は場面緘黙以外にも様々な特性があり、個々の状態に応じた指導や、自立活動を中心とした指導を行うには専門性を向上させていく必要があるため、そこに向けた研修体制や専門家のサポート体制を検討いただきたい。心因性の障害を持つ児童・生徒は割合的に少なく、自閉症の児童・生徒に向けた指導に流されてしまう可能性もある

ため、その危険性を認識しつつ、以後の検討に生かしていただきたい。

2点目に、特別支援教室の指導期間について述べたい。先ほど委員から話が挙げられたように、特別支援教室を退室した後のフォローアップ体制や代替となる支援、校内の配慮事項を具体的に保護者へ提案いただき、安心して受ける支援を減らしていく。そういった細かいグラデーションによる支援を進めることで、結果として特別支援教室の回転も速くなり、児童・生徒に対しても良い結果になっていくこともあるかと思うため、ぜひそちらもご検討いただきたい。

3点目に、研修について述べたい。資料3で区の研修について報告があったが、非常に充実しており、また焦点も合ってきたと感じた。特別支援教室巡回指導教員研修ではビジョンアセスメントトレーナーや作業療法士を講師としてお招きしたり、特別支援学級教員研修でもタブレット端末の活用による授業の改善、自立活動の指導の観点を生かした教科指導をテーマにしたり、現在求められている課題に合致した研修になっていると思った。ただし、最終目標としては通常学級での指導や支援が充実していくことが大事で、そこに対するサポートとして、研修や専門家チーム派遣、クラス支援員といった施策を行っているわけであるが、ちょっとした支援が必要な児童・生徒が多く在籍しているため、皆にとって分かりやすい、参加しやすい授業にするための校内研修、校内研究に対する支援についても積極的に取り組んでほしいと思った。例えば、デジタルMIMの活用は非常に有効で、現在ではMIMの算数版というものがある。LDといっても読み書き障害ばかりではなく、算数障害が大きな問題として取り上げられており、実はLDの算数障害である児童はかなり隠れているのではないかと思う。現在、教育課程部会教育課程企画特別部会で議論されているが、算数の誤答について分析すると、記号接地ができないことが原因として挙げられている。記号接地とは、自分の経験を踏まえて、文章問題で何が問われているのかイメージできる力、頭の中で図式化できる力を指すが、この結び付けが難しいと、足すべきものを引いたり、たまたま出てきた数字をただ当てはめたりするだけになってしまう。このように、足し算が求められているのか掛け算を求められているのかを経験からイメージできず、誤答につながるケースが非常に多く散見される。小学校低学年の段階でつまづいてしまい、学年が上がるにつれて問題が積み重なり、不登校等の問題につながってしまうこともあるため、通常学級での指導の改善や充実につながる支援をぜひ進めていただきたいと思った。

4点目に、幼稚園や保育園との連携について述べたい。特別支援は幼児期から一貫して支援をつなげるべきであるため、就学相談として就学先をどうするかという話だけでなく、支援の内容をどのようにつないでいくかところも是非報告してほしいと感じた。例えば、学校視点で見ても、ひと昔前には小学校に入学してすぐの児童はゆっくりと慣らしていき、給食も4月下旬から始めるといった入門期プログラムの取組があったが、最近では入学式や始業式を終えるとすぐに給食が始まり、幼児期の学びを新しい学校で発揮していくプログラムが圧縮されていると思う。年長の取組と就学後の入門期の円滑な接続に関する取組は例があり、非常に重要な支援だと思うため、今後もそういった面からの報告を検討していただきたいと思う。

## 5 閉会

### <委員長>

それでは、以上をもって、令和7年度第2回葛飾区特別支援教育推進委員会を終了とする。